

マイディ村まで歩きました by すずき

ネパールの学生の通学を1対1で支援する「フューチャーフラワー基金」。毎年日本からスタッフが2回ネパールを訪れ、特に農村部に住む経済的理由で学校に通えない小・中学生を面接し選び、そして支援を直接届けています。



おかげさまで、第6期は13名への支援が集まり交流倶楽部の支援を受ける学生は87名になり、ますます責任を重く感じると同時に、社会に役に立ちたいという方のお手伝いができる喜びを感じずにはられません。

9月24日、マイディ村での面接の為、現地サポーターのサルミラさんと共に、バスが通じるダディン郡ササから村人の生活路をマイディまで歩きました。ツアーでも2回、ササで支援者と子供の交流ピクニックをやりましたが、毎回子供たちが朝早くマイディを出発し3時間以上かけて会場まで会いに来てくれる時歩く、あの道です。



未舗装の道はあちらこちらに深い轍があり、泥水が溜まっています。森の中、岩場の上り坂、土砂崩れや川で寸断された道を登り下り。放牧中の家畜ともしょっちゅうすれ違います。しかし、眩しいくらい鮮やかな緑の棚田や、山の斜面に張り付くように転々とある素朴な造りの家々が私たちの目と心を楽しませてくれました。所々崖の間から流れ出している湧き水は体の渇きと疲れを芯から癒してくれました。カトマンドゥではボトル入りのミネラルウォーターか、煮沸した水道水しか手に入りませんが、そこの流れるまま飲む湧き水は今まで飲んだどんな飲み物より美味しく感じられました。まだ大学生のサルミラさんは私と同様、何度も美しい景色にため息をつき、写真を撮るために足を止め、私を案内できることを子供のように喜んでいました。

休憩しながら5時間ほど歩くと村に到着。民家の軒先に腰をかけ、靴を脱ぎ、荷物を降ろすと、その家の人が絞りたての水牛のミルクを出してくれ、ご馳走になりました。懐かしい焦げの味がする、貴重な村のミルクです。子供が寄ってきたので「ナマステ!」と私から声をかけ、よく見ると、去年私が面接し支援を受けている女の子でした。

村の朝は日の出前から始まります。水汲みや草刈、農作業の準備などを始める村人の足音や話し声が聞こえてきます。鶏の鳴き声と共に、ラジオからバジャン(朝夕の祈りの歌)が大音量で村に響きます。

去年の滞在時同様、私が目を覚ます頃には、早々と家を出て面接に列を成す子連れが数組待っていました。顔を洗い、寝床を整え、面接の準備をすると同時にお茶が出され、仕事の始まりです。サルミラさんの通訳で冷静に丁寧に、一人一人話を聞いていきますが、一人終わるとまた一人と、列にはどんどん子連れが集まってきます。午前9時ごろになり、最後の一组が終わった頃ようやく朝食です。一日目の朝にして5人以上を面接し、くたくたになりながらもご飯をいただきました。会話の内容を頭の中で反覆し、(まだまだ支援が必要な子供たちはたくさんいるんだ)と、村に来たことを実感しました。



午後は、同伴する保護者がいない子どもの家を訪問して面接したり、村人の農作業の様子を見せてもらったり、「マイディコット」まで歩いたり、近くの水場で村式の洗濯と水浴びをして過しました。マイディコットは私のマイディでの一番好きな場所です。建物はかなり朽ちてはいますが、村人が昔から祈りを捧げる神聖なヒンドゥー寺院のある丘で、村全体だけでなく向こう側の丘まで見渡せる絶景スポットです。そこにも優しいヒマラヤの風が吹いていました。

今回村には3日間お世話になりました。面接した子供は計18名に上ります。その中から、より厳しい状況の子供上位13名を支援候補者として選ばせていただきました。登下校の時刻を狙って学校にも歩いて行き、すでに支援を受けている学生とも数名会うことができました。子供たちも前回より少し慣れたようで、はにかみながらも近寄ってきたり、嬉しそうに毎日の仕事を見せてくれたりしました。言葉も少し理解できるようになったせいも、より一層村の人と近い関係が築けたような気がします。どんなに農作業や子供の世話で疲れていようと、貧しかろうと、私に出会うと所持しているものの中で一番貴重なもの(ミルク、野菜、肉など)をくれようとする、そんな村人のホスピタリティーの精神に触れ、湧き水のように清らかな心の輝きに感動し、幸せな気持ちに満たされました。

最後に、支援してくださる皆様の「善意」があってこのプロジェクトが動いているということを実感する旅でした。心より感謝申し上げます。

2012年秋 鈴木涼子